科目名	音楽文化史Ⅰ(日本の伝統音楽及び民族音楽を含む。)		担当教員	黄木　千寿子、杉山　加保里	
単位	2単位	講義区分		ナンバリング	ED3MTC106
期待される学修成果	基礎教養　教科教育				
ｱｸﾃｨﾌﾞ・ﾗｰﾆﾝｸﾞの要素	プレゼンテーション				
実務経験					
実務経験を生かした授業内容					
到達目標及びテーマ	様々な音楽とその歴史を学ぶことにより、音楽の多様性を認識し、種々の音楽文化に敬意を払う知性・感性を養うことが、この授業のテーマである。到達目標は、①様々な音楽の歴史的・文化的背景を理解することができる　②あらゆる音楽に興味を持ち、鑑賞する能力を身につけることができることである。				
授業の概要	諸民族の音楽は、その民族固有の文化に支えられているために、時に我々の慣れ親しんだ音楽形態とは全く異なっており、理解が困難なものもある。一方我々に身近な西洋芸術音楽は、全ての音楽が一並べにされる現代にあって、歴史観をもってそれにじっくりと向き合うことは少ないといえよう。本授業では、これらの音楽を文化的、歴史的に概観し、視聴覚教材を用いながら平易な解説を行い、さらにそれを基に学生諸君が具体的作品について調べ、発表することで、それらに親しみ理解できる力を身につけてゆく。				

授業計画	
第1回	日本音楽史を学ぶ意義と学校における日本音楽教育(杉山加保里)
第2回	日本音楽史概説（大陸輸入～能楽）（杉山加保里）
第3回	日本音楽史概説（江戸の音楽・歌舞伎・明治期以降）まとめ （杉山加保里）
第4回	諸民族の音楽１　アフリカと西アジアの音楽 （黄木千寿子）
第5回	諸民族の音楽２　インド・インドネシア・中国の音楽 （黄木千寿子）
第6回	諸民族の音楽３　オセアニア・北米・中南米の音楽　レポート（黄木千寿子）
第7回	民族音楽プレゼンテーション　グループに分かれ、ポリリズム、ガムラン、身体打奏などを実践する （黄木千寿子）
第8回	西洋音楽史１　古代と中世の音楽 （黄木千寿子）
第9回	西洋音楽史２　ルネサンス音楽 （黄木千寿子）
第10回	西洋音楽史３　バロック音楽　小テスト１ （黄木千寿子）
第11回	西洋音楽史４　古典派の音楽 （黄木千寿子）
第12回	西洋音楽史５　ロマン派の音楽１　　（黄木千寿子）
第13回	西洋音楽史７　ロマン派の音楽２　小テスト２（黄木千寿子）
第14回	西洋音楽史８　近・現代の音楽 （黄木千寿子）
第15回	学習到達度の確認試験と授業全体の総括 （黄木千寿子）

事前学修	2時間	第1回～第3回：日本音楽史の大まかな流れを把握しておく　第４回～第６回：各地域の民族について調べる　第７回～第14回：各時代の社会的背景を調べ、音楽史の流れと関連づける。
事後学修	2時間	第1回～第3回：各時代における個別の音楽について時代背景をふまえ整理する　第４回～第14回：学んだことを整理復習し、まとめノートを作る
ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸの方法	小テストを実施し、次週現在の学習課題がわかるようにフィードバックする。確認試験については答案用紙回収後、解説を加え、授業全体を総括する。	

成績評価方法	割合（%）	評価基準等
定期試験	0%	実施しない
上記以外の試験・平常点評価	30%	小テスト
上記以外の試験・平常点評価	70%	確認試験

補足事項	

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
特になし	なし	なし	なし	プリントを配布する
参考資料	柘植元一、塚田健一『はじめての世界音楽」（音楽之友社）ISBN 978-4276135314 片桐功、楢崎洋子ほか『はじめての音楽史』（音楽之友社）ISBN978-4276110168			

科目名	音楽文化史Ⅱ			担当教員	黄木　千寿子	
単位	2単位	講義区分			ナンバリング	ED4MTC407
期待される学修成果	教科教育　態度					
ｱｸﾃｨﾌﾞ・ﾗｰﾆﾝｸﾞの要素	プレゼンテーション					
実務経験						
実務経験を生かした授業内容						
到達目標及びテーマ	ギリシャに端を発し、20世紀に至るまでひとつの論理的な流れにおいて発展を続けた西洋芸術音楽の軌跡を、楽譜分析から読み取ると同時に、この音楽が社会・文化全体とどのように関わってきたかを考えることが本授業のテーマである。到達目標は、①西洋芸術音楽を楽譜から分析・考察できる　②楽曲の背後にある社会・文化を知り、西洋音楽を多面的に理解できることである。					
授業の概要	本授業では３年次で学んだ西洋芸術音楽に関する知識をより深めるため、まず楽譜をもとに楽曲を具体的に分析し、音楽を形成する諸要素や構造が、時代によってどのように変化してきたかを考察する。特に機能和声の成立・展開・崩壊の考察に力点を置く。楽譜の解読や分析は、方法論を学ぶだけでなく、実践を通して理解を深める。さらに教科書を中心として、西洋音楽とそれをとりまく社会との関わりを学び、発表する。					

授業計画	
第1回	オリエンテーション：西洋音楽史の概説と授業の進め方の説明、及び参考文献の紹介
第2回	バロック：通奏低音と協奏様式（実践課題＝通奏低音の解読）　第２回～14回：各時代のトピックを受講者で分担してまとめ、毎回の授業時に発表する。楽曲紹介を含む。
第3回	前古典派：C.P.E.バッハの音楽とその周辺
第4回	古典派：ソナタ形式の成立とその概念（実践課題＝ソナタ形式の分析）
第5回	ロマン派①：ロマン派の一般的特徴と和声の考察
第6回	ロマン派②：メンデルスゾーン、ショパン（実践課題＝ピアノ譜の分析）
第7回	ロマン派③：ヴァーグナーと後期ロマン派（実践課題＝トリスタンとイゾルデの分析）
第8回	ロマン派④：ナショナリズムと国民楽派
第9回	近代：ドビュッシーの音楽とその構造（実践課題＝ドビュッシーのピアノ曲の分析）
第10回	グレゴリアン・チャント：ネウマ譜の考察（実践課題＝ネウマ譜の解読）
第11回	中世：ポリフォニーの起こりと発展：ノートルダム楽派の技法（実践課題＝モード記譜の解読）
第12回	ルネサンス：フランドル楽派の技法：定量記譜法（実践課題＝定量記譜の解読）
第13回	現代①：シェーンベルクの１２音技法（実践課題＝シェーンベルクのピアノ曲からセリーを見つける）
第14回	現代②：トータルセリエリズムとその後（トータルセリエリズムの作品分析）
第15回	まとめ

事前学修	2時間	予め、昨年度の音楽文化史1で用いたプリントなどで各時代の概略を理解しておく。
事後学修	2時間	各回の授業で教授された内容を整理復習し、まとめノートを作成する。
ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸの方法	授業時間内に実施した、或いは提出された実践課題を学生が発表後、模範解答を示して解説を加える。 時代ごとに分担を決めて各自がまとめ発表するものに関しては、発表後にコメントする。	

成績評価方法	割合（%）	評価基準等
レポート	60%	各自が一つ楽曲を選び、授業で学んだことをもとに分析を行うことで、授業の習熟度を測る
上記以外の試験・平常点評価	40%	教科書から各自分担した箇所をまとめ発表することで、発表内容を評価

定期試験	0%	実施しない
補足事項		

教科書				
書名	著者	出版社	ISBN	備考
プリント配布	なし	なし	なし	なし
参考資料	D.J.グラウト、C.V.パリスカ『新西洋音楽史　上・中・下』戸口幸策他訳（音楽之友社）ISBN978-4276112124、978-4276112131、978-4276112148			